

2026. 春号
vol.72
[インキュビー]

incu・be

特集

社会課題が 「自分ごと」に なったとき

新コーナー

「地域に根ざした研究職、
公設試での挑戦」

開始!



incu・be vol.72 contents

特集 **社会課題が「自分ごと」になったとき**

- 04 ロボットへの情熱が、「ゴミを価値に変える」と重なったとき
(田寺 将樹さん 株式会社Spacewasp 共同創業者・CTO / 立命館大学大学院 修士2年)
- 06 現地に行き、核融合エネルギーを届けると決意した
(武田 秀太郎さん 慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 准教授 / 京都フュージョニアリング株式会社 共同創業者)
- 08 正解がわからないから、発達特性のある人たちと向き合い続けている
(義村 さや香さん 京都大学大学院 医学研究科 人間健康科学系専攻 先端作業療法学講座 准教授)

伝える、学ぶ、そして育む。それが研究コーチ

- 11 自分が納得するまで、やりきる姿勢を学び合った経験
(藤田 直己さん 大阪公立大学大学院 農学研究科 緑地環境科学専攻 博士前期課程2年)

探しにいかう 自分の場所

- 14 所属や肩書は関係ない、誰かの幸せが自分の幸せ
(仲出 雄樹さん マルホ株式会社 診断薬・医療機器事業部 事業戦略推進グループ)
- 16 化学の力を信じ、人工光合成の実現に向けて歩き続ける
(石谷 治さん 広島大学 特任教授)
- 18 研究の未来は「歴史」がひらく
(大林 太郎さん 筑波大学 体育系 助教)

地域に根ざした研究職、公設試での挑戦

- 20 繊維の地場産業を世界に紡ぐ
(長谷部 裕之さん 石川県工業試験場 繊維生活部)

あの町の研究者を訪ねて

- 22 研究の視点だけでは足りなかった一事業の視点で捉え直す機会
(双見 京介さん 立命館大学 情報理工学部 情報理工学科 助教)

Blast off! 世界を変える私の活動

- 25 救急医療から航空宇宙医学へ — 国際的視点で切り拓く新たな医療のかたち
(石橋 拓真さん 東京大学医学部附属病院 初期臨床研修医)

お知らせ

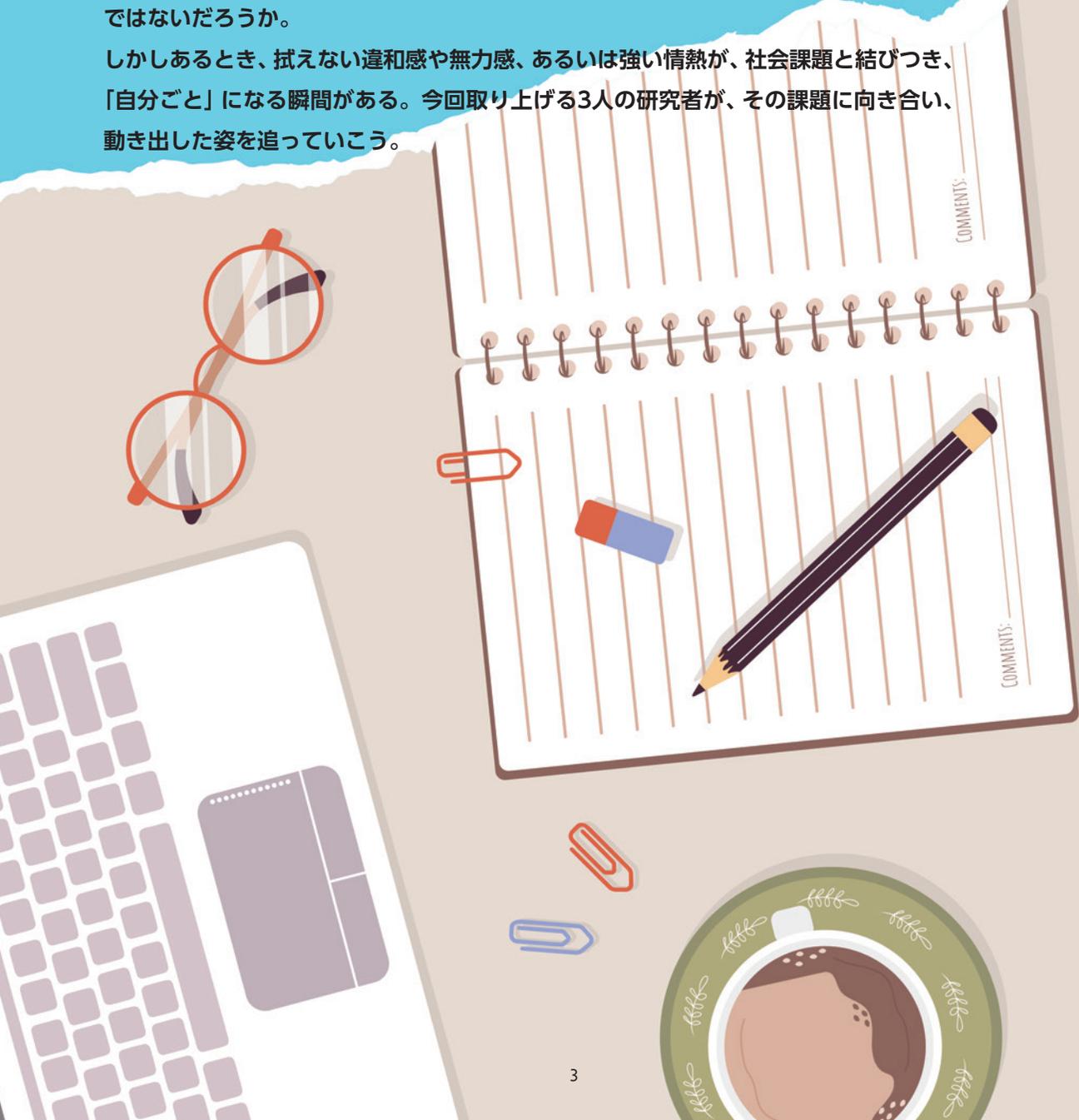
- 12 第72回リバネス研究費申請者募集中!
- 24 リバネス奨学金 太陽誘電ゼミ 第2期 修了報告!
- 26 研究キャリアの相談所
- 27 『incu・be』を作っているのはどんな人?
- 28 リバネス採用ページ

特集

社会課題が 「自分ごと」になったとき

「社会課題」と聞くと、どこか遠い出来事のように感じてしまう。ニュースで知り、重要だと理解しても、研究の背景として語ることはあっても、自分とはどこか切り離されたまま。研究室の中に籠もって研究をしていると、そんな感覚になる瞬間は少なくないのではないだろうか。

しかしあるとき、拭えない違和感や無力感、あるいは強い情熱が、社会課題と結びつき、「自分ごと」になる瞬間がある。今回取り上げる3人の研究者が、その課題に向き合い、動き出した姿を追っていこう。



ロボットへの情熱が、「ゴミを価値に変える」と重なったとき

田寺 将樹 さん

株式会社 Spacewasp 共同創業者・CTO
立命館大学大学院 修士2年



立命館大学大学院の田寺将樹さんは、大学でのロボティクス研究と並行し、植物廃棄物を家具へと再生する株式会社 SpacewaspのCTOを務める。素材そのものや3Dプリンタでの加工精度を追求する試行錯誤の末に『Waste to Value』の実現を目指す。個人の「造形への執着」が社会の「必然」と重なり、宇宙まで続く物語が始まった。

理想のロボット目指し、「製造装置」を自ら生み出す

幼少期に胸を躍らせたSFの大型ロボット。あの鋼の巨体を自分の手で動かしたいという純粋な憧憬こそが、田寺さんのものづくりの原点だ。小中高とロボット競技に打ち込む中で、「既製品の部品では理想の形や動きに届かない」という壁に直面した田寺さんは、学生には高価すぎる大型3Dプリンターを前に、「動画投稿サイトで見た外国人が自作しているなら、自分にもできるはず」と、ホームセンターの部品を組み合わせて自作を開始した。そして、高校3年生で、材料費わずか2万円、30cm四方を造形できる大型機を完成させた。大学選びでも、「日本で一番面白いロボット研究」を求め、立命館大学ヒューマノイドシステム研究室へ。そこで「学問」としてのロボティクスの深淵に触れ、研究室に泊まり込み、理論と実験を繰り返す泥臭い日々で没頭した。その結

果、片腕で50kgを持ち上げるロボットアームや高出力アクチュエーターの開発に成功。サイエンスの力でかつて胸を躍らせた空想を現実近づけていった。

理想の「造形」追求した先に、地球を救う素材があった

転機は大学2年生の時、SNSを通じて届いた一通のメッセージだった。建設用3Dプリンターを構想していた伊勢崎勇人氏（現・Spacewasp代表）との出会いである。二人は意気投合し、大型3Dプリンターによる社会実装を目指し始めた。当初、彼らが扱おうとしたのは安価なりサイクル樹脂だった。しかし、熱をかけてプリントすると激しく収縮し、造形物が歪んでしまうという技術的課題に直面する。「エンジニアとして、完璧な造形を諦めたくない」。あらゆる素材を試すなかで、たまたま植物由来のセルロース系樹脂を混ぜたところ、驚くほど収縮が収まることを発見した。



▲3Dプリンターで家具をつくる田寺さん



▲一部屋用に作られたSpacewaspの家具一式

「この1年間の試行錯誤がなければ、Spacewaspは存在しなかった」と振り返る田寺さん。この技術的な「解」が、彼の意識を大きく変えた。印刷精度を上げるための選択が、結果として環境負荷を激減させ、植物廃棄物に新たな価値を与えるという「環境課題の解決」に直結したのだ。ロボット開発への情熱が社会の課題と重なり、彼の中で「自分ごと」へと昇華した瞬間だった。

課題解決のフィールドは宇宙まで広がる

現在、Spacewaspでは「ゴミを価値に変える」をコンセプトに、100%植物由来の樹脂を用いた内装空間や家具の事業を展開している。田寺さんはCTOとして、大学で培ったロボット技術を製造装置の改良に注ぎ込み、生産効率の向上に挑んでいる。彼らの視線は、今や地球を越えて宇宙へと向いている。「Space」には空間と宇宙、両方の意味を込めた。「宇宙でも人は食べ物を作る。そ

こから出る植物廃棄物を価値に変える技術は、宇宙での生活インフラになるはずだ」。研究室での厳密な探究と、スタートアップでの大胆な社会実装。田寺さんはその二つの世界を、驚くほど軽やかに行き来する。そんな彼の姿は、王道のキャリアパスに迷う多くの若手研究者に、関節を柔らかくして新しい世界へ飛び出す勇気を与えてくれる。
(文・八木 佐一郎)

田寺 将樹(たてら まさき) プロフィール

ロボカップジュニアなどのコンテストに出場しながら、ロボット開発をする中で、3Dプリンターを自作する。立命館大学入学後は、誰もが使える安価な大型3Dプリンターを開発するためにクラウドファンディングを行う。現在では、立命館大学大学院 理工学研究科の玄相昊教授の研究室に所属しながら、株式会社SpacewaspのCTOを務める。

現地に行き、核融合エネルギーを届けると決意した

武田 秀太郎 さん

慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 准教授
京都フュージョンアリング株式会社 共同創業者

核融合でエネルギーの問題を解決するべく、研究者としてだけでなく起業家・政府委員など多様な立場からその社会実装へ突き進んでいる武田秀太郎さん。1つのアプローチにとられない、「サイエンティスト」として課題解決に向き合う姿勢を伺った。



強まる無力感から、思わず自衛隊員に

武田さんが京都大学へ進学し、材料工学を学んでいた学部3年生の春、東日本大震災が発生した。混乱を極める社会を前に、何もできない無力感を感じていた。「ある日、社会のお金を使いながらのうのと図書館で勉強する自分に耐えきれなくなり、その足で休学届を出して陸上自衛隊へ入隊しました」。自衛隊員になった武田さんは、2年間にわたり被災地で支援に直接関わった。その中で肌で感じることとなったのが、福島第一原子力発電所事故の影響の大きさだ。元々自身はサイエンティストだと考えていたが、そのサイエンスが、そしてエネルギーが、いかに人の暮らしを変えてしまうのかを目の当たりにしたという。この経験をもとに、自分自身はエネルギーの問題を解決していかなくてはならない、と研究テーマの変更を決断した。選んだテーマは「核融合」。実現すれば安全で汚染もなく、莫大なエネルギーが

取り出せる、夢のエネルギー源だ。

レールを外れる覚悟が、 バングラデシュに導いた

使命感を持って大学に戻った武田さんだったが、当初は強い恐怖に襲われた。自分が2年間休学して自衛隊に入ることによって「まともな」人生のレールを外れてしまったことに気がついたからだ。しかし、その不安は次第に解消された。たとえレールを外れたとしても、それが信念を持つての行動であれば、世の中の人にはプラスに捉えてくれることがわかったからだ。これに気づいて以来、武田さんの行動は更に加速していく。本当にエネルギーを必要とする場所を見てみたいと、青年海外協力隊としてバングラデシュに向かった。出会ったのはろうそくの明かりで勉強する田舎の子供たちと、発展のために環境を汚染しながらもエネルギーを使い続ける都市の人々だった。本当にエネルギーを必要とする人にどうやったら届けられ



▲共同創業した核融合スタートアップ「京都フュージョニアリング」のメンバー

るのか。そう考えた武田さんはさらなる行動に進んでいく。

行動する「サイエンティスト」として生きる

博士号取得後、ハーバード大学への留学を経て、京都フュージョニアリング株式会社を創業、更に国際原子力機関 (IAEA) で国連職員としても活動した武田さん。多様なキャリアを歩んでいるように見えるが、これらの動きはすべて、核融合発電を社会実装するためにどうすればいいかを考えた結果の行動だという。「最近では政策議論の中でも取り上げられるようになり、取り組んできた甲斐があったと感じています。諸外国では研究者が起業やポリシーメイキングに関わるのは一般的ですし、もっと日本からもこのような動きをする研究者が出てきて良いはずです」。今春からは一般に核融合の理解を広めるために慶應義塾大学フュージョンインダストリー研究センターを立ち上げるなど、その動きは止まらない。課題に対す

る問いと、その解決に向けた仮説を持ち、科学的に思考して行動する人、それこそがサイエンティストなのだ。もし、信念があるのなら、既存のルールを外れることを恐れる必要はないはずだ。

(文・駒木 俊)

武田秀太郎 (たけだ しゅうたろう) プロフィール
京都大学在学中の2013年より2年間陸上自衛隊中部方面隊 予備2等陸曹として、東日本大震災の復興支援に関わる。博士 (エネルギー科学) を取得後ハーバード大学にて Master of Liberal Arts (サステナビリティ学) を取得。京都フュージョニアリング株式会社創業後、IAEA 科学応用局 プロジェクト准担当官、京都大学大学院総合生存学館 特定准教授、九州大学都市研究センター 准教授を歴任し、現職。日本国籍で存命する唯一のマルタ騎士団ナイトでもある。

正解がわからないから、発達特性のある人たちと向き合い続けている

義村 さや香 さん

京都大学大学院 医学研究科 人間健康科学系専攻
先端作業療法学講座 准教授



異分野との出会いや劇的な転機によって道を切り開く。そんなキャリアストーリーは多い。しかし、義村さや香さんの歩みは、明確な目標や、決断による力というよりも、「何が正解かわからない」という感覚を手放さずに現場と向き合い続けて進んできた結果だった。答えの出にくい問いは、いつも目の前の一人ひとりの当事者との関わりから立ち上がってきた。

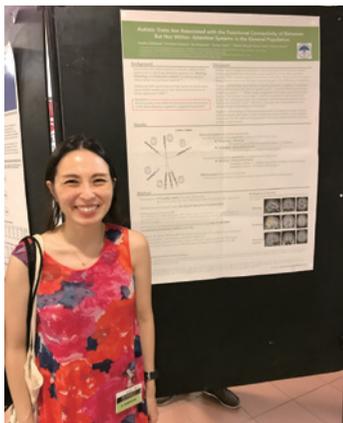
支援のあり方は、成長とともに変わっていく

中学生の頃から、義村さんは発達特性を持つ人の行動や言動に関心を持っていた。それは「問題」ではなく「不思議で興味深い」ものとしての捉え方だった。精神科医として臨床の現場に立つようになると、発達特性を持つ人たちと日常的に向き合うようになった。

子どもの頃は支援を受けやすく、学校生活も比較的安定しているケースが多い。学校での適応や日常生活の安定が見えていると、支援は一段落したのものとして扱われがちだ。しかし、神経発達症のある人の「困りごと」は、ライフステージが進むにつれ形を変えていく。子どもの時期に日常生活がうまくいっていても、思春期や成人期には別の課題が現れることも少なくない。だからこそ、その変化に応じて支援のあり方も変わっていく必要があるのではないか。この視点から、大学での研究も成人期を対象とするものへと広がっていった。

思考・意図と理解のあいだにあるズレ

成長の先に待ち構える現実を見つめるなかで、義村さんは家庭裁判所の医務室技官や企業の嘱託医として、医療の枠を超えた現場にも関わるようになる。そのなかで、少年事件の当事者となるケースや、コミュニケーションや臨機応変さなどが重視される職業を志しながらも、特性との相性の問題があり、職務適性の観点から厳しい判断を受ける姿に向き合ってきた。本人の思考や意図と、社会がその人をどう理解するかとの間に、ズレがある。義村さんが感じていたことは、そのずれ違いが、本人の背景や意図が十分に共有されないまま判断が下される場面で特に問題となるということだった。問題行動への対処や、職業適性としての判断など、その場で下される判断は、本人の人生にとって取り返しのつかない意味を持つことがある。それなのに、結果が出てしまえば、そこに至るまでの支援や背景が後から丁寧にすくい



▲学会発表をしている様子



▲企業の人に向けた講演会の様子

上げられることは少ない。この気づきは、社会側の受け入れの仕組みを考える視点へとつながっていった。

臨床で生まれた問いを研究で育てよう

こうした経験を重ねながら、義村さんは大学での研究を続ける道を選んだ。現場で感じてきた違和感や問いを、そのままにしておきたくなかったからだ。

「何をもって解決と言えるのか、わからない課題もあるのではないか」

発達特性や就労をめぐる「困りごと」は、一つの正解や明確なゴールに収束しないことが多い。そこで、義村さんは、職場環境や組織の受け入れ方そのものに目を向け始めた。SMBC京大スタジオとの活動もその一例だ。日本総研の研究者と共に、神経発達症の認知研究をエビデンスとして提示しつつ、認知特性を踏まえた職場環境のあり方について提案する取り組みも始めた。

義村さんにとって研究とは、誰かを「正しい状態」に導くためのものではない。多様なあり方が成り立つ余地を、社会の中にどう残し、どう支えるかを考え続ける営みだ。そして、その姿勢を持ち続けること自体が、一つの研究キャリアのかたちなのかもしれない。（文・土屋 菜摘）

義村 さや香 (よしむら さやか) プロフィール
平成15年京都大学医学部医学科卒業後、同大学医学部附属病院精神神経科、公立豊岡病院精神科で勤務。京都大学大学院医学研究科博士課程を修了後、医務室技官として京都家庭裁判所に勤務ののち、平成26年より京都大学大学院医学研究科発達障害支援医学講座特定助教に着任。同研究科人間健康科学系先端作業療法学講座特定講師を経て、令和5年より現職。先端作業療法学講座着任後は、履修証明プログラム(ASD project)により、発達症に対し多職種連携を行いつつ支援にあたる医療関連人材の育成も行う。

もっと自由に動いていい。 研究者なんだから。

社会課題が自分ごとになったとき、研究は「生き方」へと変わる。田寺さんは、ロボットへの情熱と資源循環の課題が重なった時に自分ごととなり、ラボの中でのロボット開発もベンチャーの立ち上げも、田寺さんにとっての「研究」になった。武田さんは、震災や途上国の現場で感じた無力感をきっかけに、エネルギーを届けるべく、起業家、政府委員と、広義の「サイエンティスト」として活動し続けている。義村さんは、発達特性や就労をめぐる課題において、臨床と研究両方の視点から「正解がわからない」ということと向き合い続ける姿勢を貫いている。

研究室の中にとどまらずとも、どこへ行っても「研究者」でありつづけることはできる。自分ごとのテーマが、社会の中に見つかったなら、思うがまま縦横無尽に行動しよう。



伝える、学ぶ、そして育む。それが研究コーチ

若手研究者が中高生の研究に伴走して指導する研究コーチ。単なる教育活動以上に、自分に返ってくる気づきや発見があるはずです。このコーナーでは、研究コーチの経験を通じて成長する若手研究者の姿を取り上げます。

自分が納得するまで、やりきる姿勢を学び合った経験

大阪公立大学大学院 農学研究科 緑地環境科学専攻 博士前期課程2年
藤田 直己 さん

海洋・水環境分野の研究に挑戦する10代研究者の研究を支援する「マリンチャレンジプログラム」の研究コーチに2025年度から参加。自身が専攻する農業農村工学分野の若手交流会の実行委員も務め、所属する研究分野の活性化や交流の促進に向けた活動も積極的に推進する。



幼少期には「地球のお医者さんになりたい」と言っていたほど地球や環境問題に興味があったという藤田さん。研究室への配属をきっかけに、農業基盤を支えることを主としつつ、環境保全や防災など幅広く関与できる農業農村工学に惹かれた。現在は、水資源評価や洪水対策などを行う際に必要な降水量データに着目し、降水量データが十分に揃っていない地域のデータ補完技術として、AIを用いて河川流量から降水量を逆推定・補完する手法を研究している。この手法により、農業生産や人の生活に関わる水資源の情報がより効果的に活かされることが期待される。将来的には、健全で持続的な農業基盤・水環境の保全に貢献し、「人と自然との調和」について探究する研究者になりたい、と藤田さんは話す。

藤田さんがマリンチャレンジプログラムに参加したのは友人からの誘いがきっかけだった。担当したのはアメリカザリガニに付着しているヒルミミズの生息環境を研究する生徒だ。自分の意見をしっかりと持っている生徒で、その考えを貫こう

とする場面もあり、どうしたらアドバイスを取り入れてもらえるか悩んだこともあったという。しかし、実験や発表を重ねて成長していく様を見て、いかに「自分がいいと思うアドバイスができるか」よりも「生徒自身の考えを尊重しつつ、サポートできるか」が大事だと藤田さんは気づいた。また、担当した生徒はヒルミミズの生息環境を熱心に自分の足で調査しており、研究の考察は、現場でしっかり観察したことが生きていたという。藤田さんも、研究を進めていくときには、現場の状況を把握することを意識している。予測した結果と実際の現場での結果がずれたときに、実際の状況を確認して差異をしっかりと捉え、考察につなげることが、自分の研究を真に役に立つものへ近づけるために重要だと考えていたからだ。「彼の姿を見て、改めてそれが大事だと実感した」と話す。次世代研究者と学び合いながら成長していく藤田さんの今後の活躍が楽しみだ。

(文・西村 知也)

研究コーチは随時募集中！登録はこちら！

(リバネスIDのログインが必要です)



第72回 リバネス研究費

助成対象：自分の研究に熱い思いをもっている40歳以下の
若手研究者・大学院生・学部生・高専生
用途：採択者の希望に応じて自由に活用できます

●京セラ賞

対象分野

ものを起点に次世代につながる価値を生み出すあらゆる研究

テーマ例

- 金属とセラミックス等、異種材料を組み合わせた材料/部材に関する研究
- 異種材料間の界面接着に関する研究
- 生体適合材料や生体模倣材料に関する研究
- 「もの」あるいは「ものづくり」に役立つ解析技術に関する研究
- CO₂の資源化に関する研究
- セラミックスのリサイクルや元素戦略に関する研究

採択件数 若干名

助成内容 研究費50万円

申請締切 2026年4月30日(木) 18:00まで

パートナー企業 京セラ株式会社

担当者
より
一言

京セラのものづくり研究所とCN技術研究所では、ものづくりの基盤となる研究開発に日々取り組んでいます。材料や資源循環に関するテーマはもちろん、それに限定せず「もの」を起点に人の営みをもっと良くするような次世代につながる価値を生み出すテーマを広く募集します。

●サポートまちづくりラボ賞

対象分野

まちづくりに関するあらゆる研究

「まちづくり」の概念を共につくる研究者を募集します。都市計画、公共空間活用、都市モビリティ、スマートシティ、脱炭素、再生可能エネルギー、インフラ管理、生態保全、災害対策、地域活性化、歴史的景観、文化継承など、まちづくりに関するあらゆる研究テーマを募集します。

採択件数 若干名

助成内容 研究費50万円

申請締切 2026年4月30日(木) 18:00まで

パートナー企業 株式会社サポート

担当者
より
一言

株式会社サポートの経営理念は、「想いを結び、明日へつなぐまちづくり」です。都市計画や区画整理を中心としたまちづくりのコンサルティングを行い、地権者の皆さまとともに“未来のまちをデザイン”しています。いまのまちづくりには、人口減少社会への対応、DX、スマートエネルギーの活用など、持続可能な社会に向けた新たな視点が求められています。固定観念にとらわれず未来のまちを描く研究テーマを、私たちと一緒に考えてみませんか。

●CCU賞

対象分野

高濃度CO₂を活用するあらゆる研究

DAC (Direct Air Capture)等の技術により濃縮されたCO₂溶液、または液化CO₂を活用して新たな価値づくりにつながる研究アイデアを募集します。回収された炭素を、次の社会を形づくる何らかの「資源」へと転換することを目指す、あらゆる分野からの挑戦をお待ちしています。

採択件数 若干名

助成内容 研究費50万円

申請締切 2026年3月31日(火) 18:00まで

パートナー企業 株式会社リバネス

担当者
より
一言

2025年にノーベル賞を受賞したMOFを始めとした様々なCO₂吸収材料や、有機系廃棄物のガス化などにより、従来は大気中に散逸していたCO₂を濃縮された状態で取り出す様々な技術が進展し、社会に実装されてきています。本賞ではその高濃度CO₂を活用して新たな価値を作るCCU (Carbon Capture and Utilization) のUtilizationの部分における、新たな視点でのワクワクする研究を募集します。

詳細及び申請方法についてはこちらから

<https://r.lne.st/>



探しに行こう 自分の場所

目標を見つけ、実力を養い、
理想の場所にたどり着くために
どんな道を進むべきだろうか。

どんな研究者になりたいのか、
活躍するには何が必要なのか。

そして、どんな研究キャリアがあるのか。

ただ、じっと待っていても答えは見つからない。

いろいろな人に出会い、

さまざまな場所を見ることで

自分の未来を描くヒントを見つけよう。

変化を楽しみながら

さあ、自分の場所を探しに行こう。

探しに行こう 自分の場所

所属や肩書は関係ない、 誰かの幸せが自分の幸せ

仲出 雄樹 さん

マルホ株式会社 診断薬・医療機器事業部
事業戦略推進グループ

大企業やベンチャー企業、組織の大きさの違いを恐れず、「会社のためでなく、社会や誰かのために動くことが、自分自身を前に進める」とキャリアを歩んできた仲出雄樹さん。そんな彼も「会社のために働く」を疑うことなく仕事に邁進する時期があったという。挑戦と失敗を重ねる中で、本当に価値が生まれるのは、会社ではなく、社会を起点にしたときだと確信を持つに至った道のりを聞いた。



社会貢献を志して、メーカーへ

「モーターの分野では、1%効率が良くなるだけで中規模クラスの原子力発電所が4基減らせるほどの省エネ効果が生まれると言われていんです。そんな研究成果を社会に還元できたらすごくないですか？」そう笑顔で話す仲出さんは、環境問題の解決に取り組みたいと考え、大学では燃料電池の研究に打ち込んだ。その中で、「生涯をかけて新しい技術を生み出すよりも、2~3年というスパンで、1つでも多く研究成果を社会に出すようなことがしたい」と、博士課程ではなく、大手メーカーへの入社を選んだ。ここでは世界からパーツや技術を仕入れ、いかに安くて良い製品をつくるかに取り組むグローバル調達業務に従事していたが、あるとき仲出さんは気づく。「会社が成長するためには、調達部品の最適化をし続けるだけでは限界がある。新たに価値を生み出し、利益を生む事業や製品を創らないといけない」。経営者にもこの思いをぶつけるうちに、新規事業創出のプロジェクトリーダーに抜擢された。6年

間で20以上もの企画に挑戦するも、軌道に乗ったのはたったの2つ。その2つはいずれも会社のためではなく、「世の中に必要だ」と素直に思えるものだった。「世の中に必要なものを、ちゃんと届けていこう」と、仲出さんは人生のベクトルを社会に向ける決意をした。

子ども誕生を転機に人生指針を決める

ある時、様々な社長に自分でインタビューを申込み、そこから得た示唆を活かし、自分の人生目標を立てるという研修に参加した。その中で「年輪経営」で有名な伊那食品工業の役員から次のような話を聞いたという。

「大樹になるにはしっかりとした幹が必須。そのうえで、大樹の年輪のように一輪一輪成長していく必要があります、企業も同じだと考えています」。

これだ！と強く共感した仲出さんは、自分自身の幹を見つめなおした。自分の子どもの誕生という大きな転機もあり、子どもたちが生きるこの日本を持続可能なものにするために、40代では「日本の社会保障費を抑制する」、50代では「教育に



▲ Giftsとしてピッチする仲出さん

取り組む」と、長期の人生プランを打ち立てた。日本の社会保障費を抑制するために全世代にとって良い方法は何なのか、私が取り組むべきことは何なのかを考えていた時に、とあるベンチャーの代表と出会う。

経営危機のベンチャーでの2つの決断

腹部に巻くだけで超音波検査が行える胎児エコー装置の開発に取り組むベンチャー企業、株式会社Giftsの代表との出会いが私の人生をまた大きく変えた。「初対面でしたが、話していてすぐに意気投合しました」。会話を重ねるうちに、想像以上に切迫した状況を知る。この技術が世に出ないのは社会にとって大きな損失であり、この医療機器を世に出し、赤ちゃんが安全に産まれる社会を作ることが社会保障費の抑制にも貢献できる。そう確信した仲出さんは「この開発を止めてはいけない」と、Giftsへの参画を決意した。そこからは資金調達、事業開発、同志集めに奔走した。次第に「使いたい」と名乗りを上げてくれる医師も着実に増えていった。一方で、まだプロダクトが未完成という現実が、重くのしかかっていく。限られた資金の中で、この装置を完成させるために自分はどうするべきか。悩んだ末に出した結論は、身を引くことだった。人件費をプロダクト開発エンジニアの採用に充てるため、自身は外部アドバイザーに転じることにした。現在、Giftsは

仲出 雄樹（なかで ゆうき）プロフィール

早稲田大学大学院先進理工学研究科修士課程修了後、2009年、パナソニック株式会社に入社し、グローバル調達事業に従事後、2014年より、新規事業開発プロジェクトのリーダーに就任。2021年より、西日本電信電話株式会社にて遠隔ロボットの開発や町工場へのAI導入を推進し、人手不足解決に尽力。2024年、株式会社GiftsにCOOとして参画。現在はアドバイザーとして関与しながら、マルホ株式会社で皮膚疾患に悩む患者さんを救う新たな医療機器開発に挑戦中。人生のモットーは「自分にしかできない価値を提供すること」であり、日々もがきつつも実践中。

着実に開発を進めている。

他者の幸せが、自分を幸せにする

仲出さんが選んだ次の場所は、日本を代表する皮膚領域の医薬品や医療機器を取り扱うマルホ株式会社だ。現在は、皮膚疾患に悩む患者さんを救うため、新しいデジタル医療機器の事業開発に挑戦している。この事業を通じて、医療を患者さんにとってより身近なものにすることで、症状の改善と治療の効率化が同時に実現できる社会をめざしている。「皆さんの人生においても決断に迷う場面が多くあると思います。大事なことは、決断した道を信じ、目の前の仕事に全力で向き合うことです」社会のために頑張ることが、究極的には自分のためでもあると仲出さんはいう。

現実を直視し、その時点での最善を選び続ける。その積み重ねが人の役に立ち、気づけば自分自身の人生も前に進んでいる。仲出さんの歩みは、「その場でどう働くか」ではなく、「人生をどう生きたいか」という問いに向き合い、行動し続けてきた軌跡そのものだ。

文：正田 亜海

プロジェクトをご一緒した頃から、他人のために動くことを迷わず選び続ける姿に心を打たれてきました。取材を通して、改めてその生き方に魅了されました。



探しに行こう 自分の場所

化学の力を信じ、 人工光合成の実現に向けて歩き続ける

石谷 治 さん

広島大学 特任教授

研究は面白い。未知の課題に向き合い、考え抜く過程には他では得られない魅力がある。しかし、将来の進路を前にしたとき、純粋な「面白さ」だけで道を選べるものだろうか。このテーマに人生を賭けていいのか、より確実な道を選ぶべきか。そんな葛藤の中で、研究者は自らの使命をどこで見出すのだろうか。人工光合成研究を続けてきた石谷治さんに、その原点を聞いた。



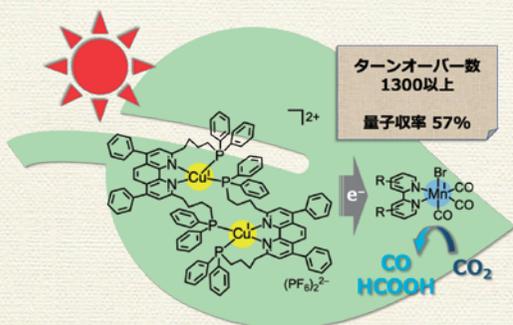
二酸化炭素を資源に変える

石谷さんが取り組む人工光合成の研究は、太陽光で二酸化炭素を再び「炭素資源」へと再生する試みだ。背景には、エネルギー資源や炭素資源の枯渇、地球温暖化といった課題がある。「温暖化対策として化石燃料の消費抑制が叫ばれているが、同時に炭素資源の問題も看過できない。私たちの生活を支える多くの物質は石油などの化石資源由来であり、枯渇すれば暮らしそのものが立ち行かなくなる」と、石谷さんは警鐘を鳴らす。人工光合成が実現すれば、大気中のCO₂を削減しながら、太陽光からエネルギーと代替資源を同時に得られる「理想的な炭素循環」が成立する。しかし、二酸化炭素は極めて安定した分子であり、高効率に還元できる光触媒の開発は容易ではない。それでもこの課題に向き合い続けてきた。

喫茶店で芽生えた使命感

そんな石谷さんだが、意外にも自分の研究テー

マを定めるまでには多くの迷いがあった。「将来、何をして生きていくのか」「どうしたら意味のある人生になるのか」そんな問いが頭から離れず、答えの見えないまま悩み続けていたという。幼少期から化学は好きで、実験で理屈を突き詰める過程にも面白さを感じていた。しかし、当時は公害問題の影響で化学への風当たりが強く、「化学は悪者だ」という雰囲気の前に、それを一生の仕事にすることを決断できずにいた。転機は、学部4年生のころ、たまたま訪れた喫茶店で手に取った雑誌・プレイボーイに載っていた「化学が地球を救う」という見出しが目に入ったのだ。それは当時この分野で最先端の研究を行っていた化学者による寄稿記事であり、エネルギー問題は化学の手法で解決可能であり、光を化学エネルギーに変換できると述べられていた。自身の愛する化学が、地球規模の課題解決に直結している。それが、石谷さんの中で化学を続ける理由として明確になった瞬間だった。



▲石谷さんが研究を行った、光増感剤と触媒を用いた太陽光によるCO₂のギ酸(HCOOH)への高効率還元反応(竹田、石谷ら *J. Am. Chem. Soc.* 2018, **140**, 17241-17254)。

外に出たからこそ得た自信

記事との出会いが、進学先を見直すきっかけになった。所属研究室への進学がほぼ決まっていたにも関わらず「人工光合成の研究をやりたい」と教授に相談し、大阪大学大学院へ進学した。そこで出会ったのが、光化学を研究していた朴鐘震先生だった。長い間、在日外国人は国立大学で実質雇用できない制度があったため、研究員という厳しい環境で研究を続けられた後、制度の改善により助手を務められていた。そんな環境下でも、研究にすべてを注ぐ朴先生の姿勢と圧倒的な実力に強い衝撃を受けるとともに尊敬の念を抱いたという。一方で、「朴先生と同じことをしては、自分の研究者人生は拓けない」という危機感も芽生える。自分の研究のレベルは、世界では通用しないのではないか。そんな不安を抱える中、学位を取得した石谷さんは、ドイツへ留学した。不安とは裏腹に、日々の議論や実験の現場で、石谷さんは思いがけず手応えを得ていった。日本の大学、研究室で積み上げてきた学力や実験技術は、世界の第一線でも十分に戦えるものだったのだ。

答えはなくても、積み重ねは残る

独立後は、師とは異なる問いとやり方を持たな

石谷 治 (いしたに おさむ) プロフィール
東京工業大学 名誉教授。2022年8月より広島大学の特任教授を兼務。2024年4月より専任。光を用いた化学反応の制御を専門とし、人工光合成、とくに二酸化炭素の光触媒還元反応の研究で国際的に知られる。金属錯体を中核とした光触媒反応系の構築を通じ、光エネルギーの化学エネルギーへの変換の基礎原理解明に取り組んできた。

ければならないと考えた石谷さんは、帰国後、独自の理論のもとで人工光合成研究を続けてきた。光がどのように作用し、二酸化炭素を還元するのか。反応機構の理解と効率化の両面から成果を積み重ね、国際的にも評価される研究を築きあげたのだ。現在もなお研究の第一線に立ち、学生や若手研究者とともに実験と議論を重ねている。しかし、何をやるのか、どう生きるのかが定まったのかといえば、そうではない。「今も昔も明確な将来像があったわけではない。小さな積み重ねが、自分をつくっている」と語る。これから先、何を實現したいのか、どのようなキャリアを歩むのかは、簡単に答えの出る問いではないのかもしれない。決まった出来事によって与えられるわけでもない。使命とは探し当てるものではなく、歩み続ける中で、その時々で与えられた課題に実直に向き合っていく中で育っていくものなのだと、石谷さんの歩みは教えてくれる。

文：三宅 進歩

私自身も意味のある人生にするために、日々考え続けています。正直、取材にはヒントが得られればという邪な気持ちもありました。しかし話を聞くうちに、先を見据えて答えを求めると、目の前のことを積み重ねていくこと自体に価値があるのだと気づかされました。水滴が石を穿つように、今日もまた、できることを重ねていきたいです



探しに行こう 自分の場所

研究の未来は「歴史」がひらく

大林 太郎 さん

筑波大学 体育系 助教

AIが情報を瞬時に処理する時代になっても、研究者に常に求められるのは、自ら問いを立て、深く掘り下げる力であろう。その問いを立てるための土台となるのが、歴史という視点である。今回は、総合科学としての体育・スポーツ科学に着目し、その未来を考えるうえで重要となる体育・スポーツ史研究の世界を、大林太郎さんの歩みを通してたどっていく。



揺らぎの中で見つけた、研究のはじまり

高校時代から陸上の混成競技に打ち込んでいた大林さん。体育学を選んで進学した大学1年の春、後に指導教員となる恩師の授業と出会い、直感的に体育・スポーツ史学という学問に惹かれていったという。1年生から勉強会に参加する、少し風変わりな学生でもあった。何とか卒業論文を書き上げ、大学院進学を控えていた2011年3月、東日本大震災に直面した。学術界では多くの分野で、「研究を復興にどう役立てるか」が問われていた。「大学院に進む自分には何ができるのか」。そんな問いを抱え続けるなかで、大林さんは歴史学を専攻する者として、過去の震災に手がかりを探すことにした。注目したのは、1923年の関東大震災である。調べるほどに、当時のスポーツ界もまた、現代にも通じるかたちで「非常事態下におけるスポーツの是非」に悩んでいたことが見え

てきた。「現代社会が直面する課題を考えるには、先人の試行錯誤の過程をできる限り正確に捉える必要がある」。その実感が、大林さんの研究の原点になったという。

留学とそこからの学び

大学院時代、大林さんは古代ギリシャの身体文化を学ぶべく、ギリシャ・オリンピアに留学した。講義や実習もさることながら、敬虔なイスラム教徒のルームメイトと生活を共にした経験は、とりわけ大きな学びだったという。はじめは習慣の違いに戸惑うこともあったが、ほぼ四六時中を同じ空間で過ごすなかで、その人自身の「歴史」を理解し、それぞれの地域の文化と価値を尊重することの大切さを、実感として掴んでいった。

そうした感覚は、分野を問わず研究活動にも通じるのではないかと大林さんは続ける。特定の研究対象を分析しようとするとき、いわゆる「先



▲ライター・吉武と、博士号取得時に撮影した1枚

大林 太郎 (おおばやし たらう) プロフィール

1988年愛知県生まれ。2020年に筑波大学大学院博士後期課程を修了。博士(体育科学)。同年3月より筑波大学体育系助教として体育・スポーツ史(陸上競技史、オリンピック史を中心に)の研究・教育に従事。あわせて同大学陸上競技部でコーチ(混成競技)を務める。

行研究の検討」だけにとどまらず、その学術的問題がなぜ、どのような経緯で生じてきたのかを、より広く、深く理解しようとするのが欠かせない。自分が勝負するフィールドや研究課題が見つかったなら、多少の時間と労力を割いてでも、そのプロセスを重視すべきだという。

体育・スポーツ史学と理系の学問との接点について

体育・スポーツ科学は、いわゆる文系・理系を横断する総合科学である。大林さんが大切にしているのは、歴史学の方法論をベースにしながらも、常に体育・スポーツ科学の研究者であろうとする姿勢だ。たとえば研究室では古い文献史料と向き合い、陸上競技場では学生アスリートの指導に携わる。「フィットネストレーニング」の授業では、体育に苦手意識を持つ学生と対話も重ねる。さらに健康体力学分野やコーチング学分野の研究者と意見を交わすなかで、体育・スポーツ科学ならではの学際的な問いが形づくられていく。この

ような「現場」と「研究室」の往還こそが、大林さんが応用学問としての体育・スポーツ史学に取り組む基盤となっている。

文：秦(吉武) 理香子

私自身、博士論文で体育・スポーツ史に触れたとき、研究の視野が一気に広がったと感じました。大林先生の歩みは、若手理系研究者が異分野の知を研究に生かすヒントになると再認識しました！



地域に根ざした研究職、公設試での挑戦

研究キャリアをいかせるのは、大学などのアカデミアの世界だけではない。全国に約300ある公設試験研究機関(以下、公設試)では、地域に根差した研究と企業支援を両立し、地元のものづくりを技術で支える研究者が活躍している。本コーナーでは、公設試で働く研究者たちの姿を通じて、「地域に貢献しながら研究を続ける」という新しいキャリアの形を紹介し、若手研究者・学生にその魅力を伝える。

繊維の地場産業を世界に紡ぐ

石川県工業試験場 繊維生活部

長谷部 裕之さん

最先端の知見を地元企業などの現場へ還元し、社会実装を加速させる知の拠点・公設試験場(公設試)。石川県工業試験場は、伝統の繊維技術をCFRP等の先端分野へ昇華させ、届ける「実装力」で独自の存在感を放つ。繊維研究に邁進する長谷部裕之さんは、本業の傍ら、さらなる高度化を目指し社会人博士という挑戦へ。現場で奮闘し続ける研究者の、等身大の姿に迫る。



装置を組み立て改良しながら 進める研究が楽しい

大学院時代、長谷部さんはポリエチレンテレフタレート(PET)を使い、そこから作製する繊維の強度を高める研究に没頭していた。鍵は「レーザー」だ。溶けた樹脂を微細な径のノズルから押し出し固めて繊維化する。その押し出された一瞬にレーザーを当てることで、PET分子鎖の絡まりを「ほぐす」。そうすることで理想的な分子鎖構造を制御する。「決められた試験を繰り返すだけでなく、装置を一から組み立て、試運転を繰り返しながら不具合を解消していくプロセスそのものが楽しかった」と長谷部さんは当時を振り返る。そんな「自ら手を動かす面白さ」を活かせる場所を探していたが、当時は就職の難しい時期。進路に悩む中で恩師から紹介されたのが石川県工業試験場だった。地元の長野を離れ、当初存在につい

ては詳しく知らなかった工業試験場という未知の組織へ。「自分の専門が活かせるなら」という素直な好奇心と「自治体が運営する」という安心感。そして今までに培ってきた「手を動かして形にする力」を携え、日本屈指の繊維産地である石川県での挑戦が始まった。

県を挙げて注力する、先進のCFRP研究へ

入所2年目、石川県が戦略的に注力する炭素繊維複合材料(CFRP)の大型プロジェクトへの参画が長谷部さんの大きな転機となった。未経験の装置導入から最適な加工条件の確立までを幅広く担当。CFRPは鉄より強く軽い次世代素材として注目されている。一方で樹脂と炭素繊維を密着させて複合材料化させる難しさがある。

そのままでは上手く混ざり合わないもの同士をいかに密着させるか。長谷部さんは現場では経験値としてある「複合材内部の接着の相性」をデー



石川が誇る繊維や工芸といった伝統産業を、近代化・高度化させることが私たちの原点です。現在は食品や機械など多彩な専門家が揃い、日々の技術相談から将来を見据えた独自研究まで、多角的なアプローチで地域を支えています。部署を越えて装置を融通し合うような風通しの良さも自慢。冬の雪吊りや匂の味覚を楽しみつつ、現場の課題に実直に向き合える環境です。



▲長谷部さんの職場での実験風景

長谷部 裕之(はせべ ひろゆき) プロフィール

2010年に信州大学繊維学部にて修士課程を修了。同年、石川県に入庁し、石川県工業試験場に配属。研究のさらなる高度化を目指し、2024年4月に京都工芸繊維大学大学院博士課程へ入学した後、指導教官の転任に伴い同年10月に横浜国立大学大学院へと転入。

タで裏付け、確実に製品化するための「温度や圧力のレシピ(加工条件)」を一から作り上げた。巨大な成形装置の導入から立ち上げまで、自ら手を動かし不具合と格闘する日々。それは、修士時代に装置を組み上げた経験の延長線上にあった。こうした先端的项目で蓄積した高度な知見は、そのまま地域企業への支援力へと直結している。現場から寄せられる「狙った強度が出ない」などの切実な技術課題に対し、最先端の研究結果を製品開発支援や技術移転に活かすことで、石川が誇る伝統的な繊維産業の高度化を支える力としても確実に還元されている。

アカデミアの視点からも 地元企業の強みを紐解く

実務で現場の「困りごと」に触れるうち、長谷部さんの中に新たな「問い」が芽生えた。製造現場には長年の経験則があるが、その科学的なメカ

ニズムの解明までは、手が回っていない。もし「なぜ成功するのか」を明らかにできれば、材料の性能を限界まで引き出し、産業全体の飛躍に繋がるはずだ。「現場の実践知をエビデンスへと昇華させたい。それが、研究者が地域にいる意味だと考えました」。この思いから、職場の後押しも受け、働きながら大学院の博士課程へ進学。アカデミアの知見で地元企業の技術を見直し、世界で通用する価値へと高める道を選んだ。「英語は得意ではありませんが、科学という共通言語があれば、世界と渡り合える」。地域の「なぜ」を解明する挑戦は、地場産業を世界へとつなぐ確かな力になっていくだろう。(文・橋本 光平)

あの町の研究者を訪ねて

このコーナーでは、ユニークな活動を続けている研究者を訪ねて日本各地を巡ります。もしかしたらあなたのいる場所のすぐ近くでも、研究の旅路に行く素敵な誰かに出会えるかもしれません。

研究の視点だけでは足りなかった —— 事業の視点で捉え直す機会

立命館大学
情報理工学部 情報理工学科 助教

双見 京介 さん

ウェアラブルコンピューティング、ユビキタスコンピューティングの観点から、コンピュータと人のあり方を研究する。メガネ型デバイスの実装などを通じ、研究成果の社会実装や学際的交流にも取り組んでいる。

私は現在、ウェアラブルデバイスを使って心身の状態をセンシング（計測）したり、認知・身体機能を高めたりする研究に取り組んでいます。学部生の頃から研究を進める中で、目に見えず自分でも制御しにくい人の内面をセンサーやコンピューターで捉え、働きかけて高める研究が、自分の関心と重なっていて将来的に重要な技術になると感じました。研究テーマの1つとして、目の活動のセンシング技術を扱っています。目の活動が人の状態を示すことは以前から知られていましたが、日常生活でいつでも使えるセンシング技術はほとんどありませんでした。これを実生活で使えるかたちにできたら、新しい研究や事業につながるのではないかと。そう思い、メガネ型のウェアラブルデバイスで目の健康指標をセンシングする技術の研究をしていた頃、滋賀テックプラントへのエントリーのお誘いをもらいました。「誰かに技術を事業化してもらえたらいい」と、そんな



思いからエントリーしましたが、グランプリの場でプレゼンテーションをして気付いたのは、事業化を目指すには研究とは違う視点が必要ということでした。その技術は社会からどう見えるのか、事業としてどんな価値があるのかを、自分自身が説明できなければ前に進めない、ということです。それ以降、事業化の視点を1から学ぶようになりました。研究を事業という異なる視点から捉え直すことで、この技術だけでなく、これまで取り組んできた研究を深めることにもつながるのではないかと考えています。自分の研究が社会課題の解決に役立ち、日常の中に自然に溶け込んでいく。そんな社会を思い描いています。

(文・三宅 進歩)

地域テックプランター



全国各地で実施している「テックプランター」には、研究成果を社会に届け、社会課題を解決したい研究者や起業家が集まります。ファイナリストがプレゼンテーションを行う「テックプラングランプリ」では、普段の研究生活では接することのなかった様々な属性の人との対話によって、自分の研究との向き合い方が変わることがあります。最初は、他の人の発表を聞くだけでも構いません。ぜひ参加してみませんか。

申請者募集中!

東海テックプラングランプリ

日時：2026年7月4日（土）

ぐんまテックプラングランプリ

日時：2026年7月11日（土）

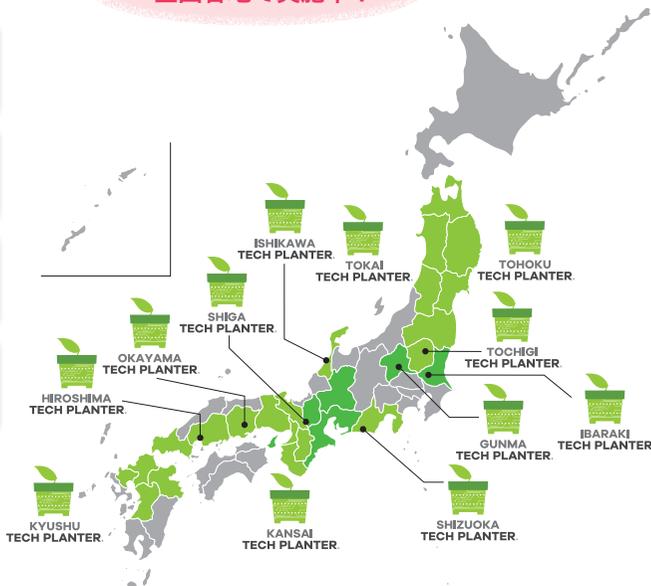
滋賀テックプラングランプリ

日時：2026年7月18日（土）

茨城テックプラングランプリ

日時：2026年7月25日（土）

全国各地で実施中!



詳細・エントリーはこちらから!

実施地域・日程についてもwebページをご覧ください。

https://techplanter.lne.st/japan_local/



双見さんも参加! 地域テックプランターのプログラム (地域や実施年度によって変わります)



エントリー募集開始

対象エリア内の大学・研究機関等にリバネスのコミュニケーターが訪問するなどして、研究者や産学連携担当者と共に、研究成果の社会実装の可能性について議論します。



キックオフイベント

エントリーを検討している研究者やパートナー企業等が、互いの持っている技術やアイデアを交換し、事業化プランをブラッシュアップする機会となります。



テックプラングランプリ

エントリーチームの中から、選ばれた9~12チームが事業化プランを発表します。パートナー企業等から選出された審査員との熱い議論が交わされます。



個別議論

グランプリ後も、リバネスの担当コミュニケーターと、事業化プランのブラッシュアップや、今後の活動に関する議論などを行うことができます。



リアルテックスクール

テクノロジーベンチャー設立支援に関して経験豊富な講師陣から、会社設立および運営において必要となるノウハウや考え方を体系的に学べる機会です。

Leave a Nest
SCHOLARSHIP

リバネス奨学金 太陽誘電ゼミ 第2期 修了報告!

太陽誘電ゼミ

『「おもしろ科学」で、人々の暮らしを豊かにする』

太陽誘電株式会社は、リバネス奨学金の趣旨に共感し、企業ゼミを立ち上げました。太陽誘電は、最先端の電子部品を生み出し、社会の様々な場所に届けるため、新たな知識を広く深く求め、技術やスキルの高度化を追求しています。そのような企業の研究者が、みなさんのアイデアや夢を実現するためのメンターとして、技術や場所を提供します。太陽誘電が掲げるのは、革新的な発明や新たな領域への展開など、思いがけない未来への扉を開くプロセスの基盤となる「おもしろ科学」です。2025年度は25件の申請より9名を採択し、各10万円を給付しました。

4回のゼミを通じて議論を重ね、世代や所属を越えた仲間と出会い、互いに刺激を受けながら夢や構想を次の挑戦につなげる土台を築きました。「6割で出せ」「動機を伝えろ」「進んだ道を正解にする」というゼミ長(リバネス代表 井上)の投げかけのもと、アクションを繰り返す中で学生たちは大きく変化しました。当初、聴衆に背中を向けて取り組みを発表していた姿は、前を向いて自らの動機を語り、周囲を巻き込む堂々としたプレゼンテーションへ。太陽誘電やリバネスとの交流を通じて視野を広げ、学びや想いを共有し、未来への展望を語れるようになりました。



ゼミ生の声～リバネス奨学金 太陽誘電ゼミ 2025を終えて～

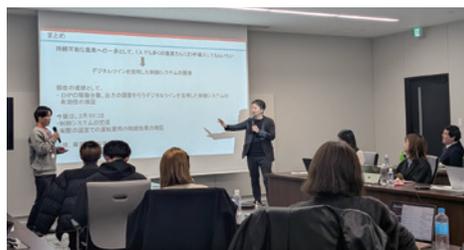
技術の合理性だけじゃダメなんだ、現場に行かなきゃ!

佐野 恵也 さん 千葉大学大学院 園芸学研究科 修士課程2年



テーマ名：温室における電気ヒートポンプの普及に向けた現場課題調査

これまで、教授から与えられた研究テーマに取り組むことが当たり前だと思っていました。しかし、ゼミでの議論を通して、研究は自分から外に出て、現場と関わっていくことで広がるものなんだという発見ができました。特に印象的だったのは、農家さんへの現場ヒアリングです。正直、投資回収できることを示せばヒートポンプ導入に前向きになってもらえると考えていました。でも実際に話を聞いてみると、「地震で倒れるかもしれない」「後継者がいなくて、長期投資は難しい」といった切実な声があり、衝撃的でした。技術がどんなに優れ、合理的でも、現場の視点に向き合わなければ導入にはつながらないということを実感しました。今後の研究も、積極的に外へ出て、現場の声を取り込みながら進めていきたいです。



▲研究を社会にひらくための議論が白熱!

リバネスは、学生のチャレンジに幅広く活用できる奨学金を設置しています。詳しくはQRコードから!



世界を変える。それは大それた事かもしれませんが、それでも小さな一歩を踏み出すところから、それは始まります。本コーナーでは『リバネス奨学金』を活用して、世界を変える活動を開始した若手研究者の声を紹介します。

救急医療から航空宇宙医学へ

—国際的視点で切り拓く新たな医療のかたち—

東京大学医学部附属病院 初期臨床研修医
石橋 拓真 さん



私のビジョンは、人類の宇宙進出に医学の側面から貢献することです。幼い頃から宇宙に憧れ、大学で医学部に入った後も「宇宙医学」という分野があることを知り、自分の宇宙への思いがより具体的かつ大きく膨らんでいきました。

研究・学術的な関心は、航空宇宙医学に関する研究および啓発活動にあります。航空機搭乗中や宇宙滞在中に生じ得る医学的リスク、極限環境が人体に与える影響、さらにはそれらに対する救急医療の在り方について、臨床医学の視点から考察・発信を行っています。航空・宇宙という特殊環境では、限られた資源の中で迅速かつ的確な意思決定が求められます。人類の宇宙進出が進んだ時に必要になる、宇宙での医療体制構築を目指しています。現在は、東京都内の大学病院で初期研修医として勤務しています。救急医療を中心に臨床経験を積みながら、将来は航空宇宙医学の分野で国際的に活躍する医師になることを目標に活動しています。

リバネス奨学金のゼミへの参加は、進路を具体化する大きな転機となりました。テーマは違えど各々のパッションとともに活動するゼミの仲間から刺激を受け、奨学金も活用して米国の

航空宇宙医学関連学会に参加しました。世界の最前線で活躍する専門家の議論に触れ、自身の目指す方向性が明確になりました。また、リバネス社員の方々から継続的なメンタリングを受けたことで、キャリアを逆算して設計する視点を学び、現在の進路選択につながりました。

将来米国で救急科専門医と航空宇宙医学専門医資格を取得するだけでなく、最終的には、これらの知見を日本に還元し、航空宇宙医学の専門医養成プログラムを立ち上げることで、次世代の医師育成と分野の発展に貢献したいと考えています。



▲活動の一環でテキサス州ヒューストンに留学した際の一枚。

研究キャリアの相談所

募集中の求人情報

研究に熱い企業があなたを待っています！

QRコードから各求人の詳細情報をご覧いただけます。興味のある方は各ページの「エントリーする」からご応募ください。リバネスの担当者からご連絡します。

募集職種

研究職

株式会社イノカ

アクアリストの力と AI・IoT 技術を組み合わせる任意の生態圏を水槽内に再現する『環境移送技術[®]』を活用した事業を展開。「自分たちが好きな自然をみつづける。」をフィロソフィーに、「人類の選択肢を増やし、人も自然も栄える世界をつくる」ことを目指しています。本技術を用いて、海水・淡水問わず様々な水環境を再現した水槽内で行う研究、リアルな生態系を子どもたちに見せる環境教育（環境エデュテイメント）を行なっています。



募集職種

研究企画職

aiwell 株式会社

東工大発ベンチャー企業として、東京工業大学との間に協働研究拠点を設け、タンパク質の網羅的解析技術『プロテオミクス』の実用化と社会実装を進めています。タンパク質の変異を画像の比較で特定することで、創薬の現場等でのバイオマーカー候補の早期の発見や、化粧品や食品等の効能効果のエビデンス取得も可能になりました。将来的にはタンパク質を AI の画像判断技術に落とし込み (AI プロテオミクス)、病気の早期発見や医師の診断支援を目指しています。



募集職種

事業開発職

株式会社 AutoPhagyGO

大阪大学発バイオベンチャーとして、オートファジー研究の成果を産業活用することを目的に設立されました。細胞内の物質や構造を分解して、細胞を再生する「オートファジー」は、老化の予防や老化関連症状を改善させる食品等の開発や、老化関連疾患の治療を行える可能性がありますと期待されています。オートファジーに関する研究開発と社会実装のオープンイノベーションプラットフォーム構築のための仲間を募集しています。



募集職種

プロジェクトマネージャー職

株式会社ガルテリア

耐酸性紅藻「Galdieria」を通じた貴金属及びレアメタルのリサイクル事業、水質浄化事業、土壌浄化事業における研究開発及び製造を行っているスタートアップ企業です。目下、実現に向けて、藻類の大量培養技術に挑戦する経験のある方を募集しています。地球規模の課題解決のための研究開発をしてみたい、と思っている方、ぜひ仲間になってください。



募集職種

研究員 (情報工学・LCA / マテリアルバランス・水工学・水産・微生物 / 微細藻類)

株式会社ノベルジェン

バイオテクノロジーを活用したグリーントランスフォーメーション技術を用いて環境問題や食糧問題を解決する事業を行っています。農林水産省中小企業イノベーション創出推進事業（フェーズ3基金）に採択され、事業を加速しており、主任研究員・研究員を募集いたします。



『incu・be』を作っているのはどんな人？

編集部スタッフを紹介します



ライター
八木 佐一郎
博士（薬学）

プロフィール

立命館大学卒、東京大学大学院 博士課程修了。神経細胞からなぜ脳の機能が生まれるのかを解明するために、神経科学者を目指し大学へ入学。大学院時代には、脳科学若手の会に所属し、積極的に研究室外部の研究者と意見交換をしながら、幅広い神経科学の知識を得つつキャリアについて考えた。ポスドクを経て、2022年入社。

高校生の頃、「人間は脳のどこがなくなったら死ぬのか」という疑問を抱いたことが、私の研究の原点です。大学では記憶の仕組みを解明するため、海馬の神経細胞の活動を記録し、記憶や行動との関係を調べる研究に没頭。情報学の研究者と連携し脳波解析を取り入れるなど、挑戦も多くなりました。当時は、アカデミアで教授を目指すことだけが研究を続ける唯一の道だと考えていました。しかし、日本学術振興会特別研究員に採択されなかったことをきっかけに、研究が簡単に止まってしまう現実を知り、「自分一人が研究するより、科学全体を加速させる仕組みをつくる方が、人類の知に貢献できるのではないか」と考えるようになりました。研究者の支援を行うリバネスと関わる中で、異分野をつなぎ、研究を進展させ、課題解決を目指すビジョンに惹かれ、そのまま入社。そこで、研究や技術以上に「人」が重要だと実感しました。あるAIを活用する芸術家との出会いをきっかけに半導体研究者を巻き込んだところ、情熱が共鳴し、想像を超えるプロジェクトが生まれました。こうした出会いをより多く仕掛けていくべく、現在私は、面白い人と人が出会うことで、科学技術の進化を加速させる場づくりに挑戦しています。この冊子『incu・be』も、そのための一つの「場」です。特集『社会課題が「自分ごと」になったとき』では自分のやりたいことに縦横無尽にとりくむ人を起点にテーマを立てました。本誌を通じて、自分にとって面白い人を見つけ、挑戦する人を増やしていきたいと思っています。

リバネスでは仲間を募集中です。

「科学技術の発展と地球貢献を実現する」の理念のもと、自らの専門性を活かし、未来を創造するプロジェクトを生み出したい研究者の仲間を募集しています。『incu・be』の制作などを通じて多様な研究者に出会うことができます。リバネスの採用については、28ページ以降をご覧ください。incu・be編集部への投げ込みも大歓迎です！巻末の連絡先までご連絡ください。

研究の続きを、社会で実験できる場所 株式会社リバネスで研究経験を活かしませんか？

リバネスは、知の集合体から新しい価値を生み出す「知識製造業」を営んでいます。

私たちのミッションは、科学技術の発展と地球貢献。

ここでは、博士号を持つ社員が社会に問いを立て、現場で社会実験を繰り返し、仮説を検証し続けて課題解決を目指しています。大学というフィールドで生まれた問いが、企業や地域、ベンチャーとの協働の中で形を変え、「新しいプロジェクト」や「社会課題の解決」へと発展していく。それが、リバネスが描く“研究の次のステージ”です。



■リバネスで活躍する博士たち



研究開発事業部

井上 剛史 博士（農学）

京都大学にて、博士号を取得後、「大学外で研究者として生きていく」というリバネス代表の言葉に惹かれて入社しました。『「知識欲」で越境し続ける仲間を増やす』をテーマに掲げ、入社後は東南アジアや中東などに渡って現地の課題を発掘するとともに、異分野の研究者と越境的な研究チームをつくる「超異分野学会」を仕掛けています。



人材開発事業部

重永 美由希 博士（理学）

九州大学で博士号を取得後、「地元にも博士が活躍できる仕事を作れないのか」という思いを持ってリバネスに入社しました。現在は『研究者の生き方・働き方を多様にする』をテーマに掲げ、研究者とともに地域に新たな産業を創出する「地域テックプランター」の立ち上げや、研究室の外に出て活躍する研究者のための「人材育成」の開発に取り組んでいます。

研究センターで社会実装を実現する

リバネスでは事業開発を行う「事業部門」と、新しい知識・技術の創出を目指す「研究部門」の両輪で活動しています。この研究部門を担うのが研究センターです。さまざまな機関との連携によって構築された「知識プラットフォーム」から最先端の知識をリアルタイムに収集するとともに、それらの知識のコア融合を促進し、世界を変える技術・研究を発信しています。

教育総合研究センター	グローバル化の急速な進行により、環境、食糧、人口問題など、さまざまな社会課題が生じています。こうした時代を生き抜くために必要な教育について研究を進めます。
ひとつづくり研究センター	熱ある個が学ぶ場の開発と研究、個と組織の新たな接点と働き方について研究します。これにより、個と組織のそれぞれが成長し、社会課題が解決していく世界を目指します。
知識創業研究センター	個人に紐付いた知を集積し、それを組み合わせて新たな知を創り出すことを使命に、分野や業種を超えた自由な枠組みの中で、新しい研究や開発を行う動きを推進します。
投資育成研究センター	科学技術への「投資育成」を研究対象として、科学技術・イノベーションに関わるさまざまな機関の相互作用と科学技術の発展について事例の創出・収集・統合を行います。
農林水産研究センター	農業、林業、畜産業、水産業に加え、ものづくりやバイオテクノロジー、加工保存技術など、食料生産の課題解決に繋がる複合分野での研究・技術開発を行います。
ものづくり研究センター	ものづくりに関わるさまざまな課題の仮説検証を行い、世界中で生み出される「新たな知」を最速で社会実装する仕組みと場作りの実現を目指します。
国家政策研究センター	経済レベル、文化、商習慣が異なる各国の最新の政策を比較検討し、自国にとって最適な要素を組み合わせて探索する実証研究を行います。

あなたの研究力が、社会を変える第一歩に

採用に関する詳細や最新のイベント機会は
「リバネス・採用」で検索してください

<https://lne.st/recruit/>

saiyo@lne.jp





人材応援 プロジェクト

私たち株式会社リバネスは、知識を集め、コミュニケーションを行うことで新しい知識を生み出す、日本最大の「知識プラットフォーム」を構築しました。教育応援プロジェクト、人材応援プロジェクト、研究応援プロジェクト、創業応援プロジェクトに参加する多くの企業の皆様とともに、このプラットフォームを拡充させながら世界に貢献し続けます。

(50音順)

株式会社ARK
artience株式会社
株式会社IHI
株式会社IDDK
株式会社アグリライト研究所
アサヒ飲料株式会社
UntroD Capital Japan 株式会社
株式会社EAGLYS
株式会社イノカ
株式会社A C S L
株式会社Eco-Pork
エステー株式会社
株式会社エンドファイト
大塚食品株式会社
株式会社CULTA
株式会社ガルテリア
カルビー株式会社
キオクシア株式会社
京セラ株式会社
キリンホールディングス株式会社
建口ボテック株式会社
ザ・ハーモニー株式会社
株式会社サンケイエンジニアリング
三洋化成工業株式会社
株式会社ジャパンモスファクトリー
新明和工業株式会社
株式会社スタートアップクラス
住友ゴム工業株式会社
株式会社セルフファイバ
綜研化学株式会社
ダイキン工業株式会社
大正製薬株式会社
ガイドグループホールディングス株式会社
太陽誘電株式会社
株式会社中国銀行

株式会社天地人
東武不動産株式会社
東洋紡株式会社
株式会社ニッポン
日本ハム株式会社
日本たばこ産業株式会社
株式会社NINZIA
株式会社NEXTAGE
株式会社NEST RdLAB
株式会社BIOTA
長谷虎紡績株式会社
株式会社Hundred Semiconductors
東日本旅客鉄道株式会社
株式会社日立製作所
株式会社PITTAN
株式会社ヒューマノーム研究所
fabula株式会社
株式会社フォーカスシステムズ
富士電機株式会社
株式会社フツパー
株式会社プランテックス
マイスターズグリット株式会社
マイボックス株式会社
株式会社MACHICOCO
株式会社マテリアルゲート
株式会社ミーバイオ
株式会社メタジェン
モバイル・インターネットキャピタル株式会社
モルミル株式会社
株式会社山田商会ホールディング
ugo株式会社
株式会社吉野家
株式会社Liberaware
レボックス株式会社
ロート製薬株式会社

若手研究者のための研究キャリア発見マガジン『incu・be』とは

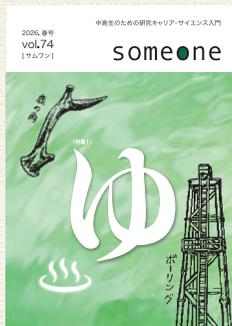
『incu・be』は、目標を見つけ、それに向かって実力を養い (incubate)、未来の自分をつくり出す (be) ためのきっかけを提供します。自らの未来に向かって主体的に考え行動する若手研究者を、企業・大学とともに応援します。

『incu・be』の配布・設置について

『incu・be』は、全国の理工系大学・大学院の学生課・就職課・キャリアセンター等に設置いただいているほか、「研究応援教員」のご協力により研究室や講義にて配布いただいております。学校単位での配布・設置をご希望の場合、その他お問い合わせは下記までご連絡ください。

株式会社リバネス incu・be編集部
TEL : 03-5227-4198
E-mail : incu-be@Lne.st

中高生のための研究キャリア・サイエンス入門
『someone』 (サムワン)



研究をはじめたばかりの読者に、最先端の研究内容をご紹介します。未来の研究仲間となる後輩にお勧めください。お問い合わせ : ed@Lnest.jp

++ 編集後記 ++

生成AIがだいたい世の中に浸透してきていますが、記事書きにおける生成AIの活用の仕方は、リバネス内でも試行錯誤しながらやっています。慣れてくると、「AIで書いた文」ってなんとなくわかるような違和感があるので、不思議なものです。incu・beの記事は、記者の気持ちが読んでも浮かんでくるようなものを目指していて、複数の人が介在して仕上げています。それがあからこそ「研究者の生き様」のおもしろさが伝わるものと考えています。文章の表現の仕方や言葉のチョイスなど、その息づかいまで味わってみるのもおもしろい読み方かもしれません。(西村 知也)

Leave a Nest

2026年3月1日 発行

incu・be編集部 編

staff

編集長 西村 知也

編集 磯貝 里子/岸本 昌幸/楠 晴奈

重永 美由希/篠澤 裕介/長 伸明

記者 駒木 俊/正田 亜海/土屋 菜摘/橋本 光平

秦 (吉武) 理香子/三宅 進歩/八木 佐一郎

art crew さかうえ だいすけ

清原 一隆 (KIYO DESIGN)

発行人 丸 幸弘

発行所 リバネス出版 (株式会社リバネス)

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町 1-4

飯田橋御幸ビル 6階

TEL 03-5227-4198

FAX 03-5227-4199

E-mail incu-be@Lne.st (incu・be編集部)

リバネス HP <https://lne.st>

印刷 株式会社 三島印刷

© Leave a Nest Co., Ltd. 2026 無断転載禁ず。

